OpenAI DevDay 2026: 知財業務のパラダイムシフト

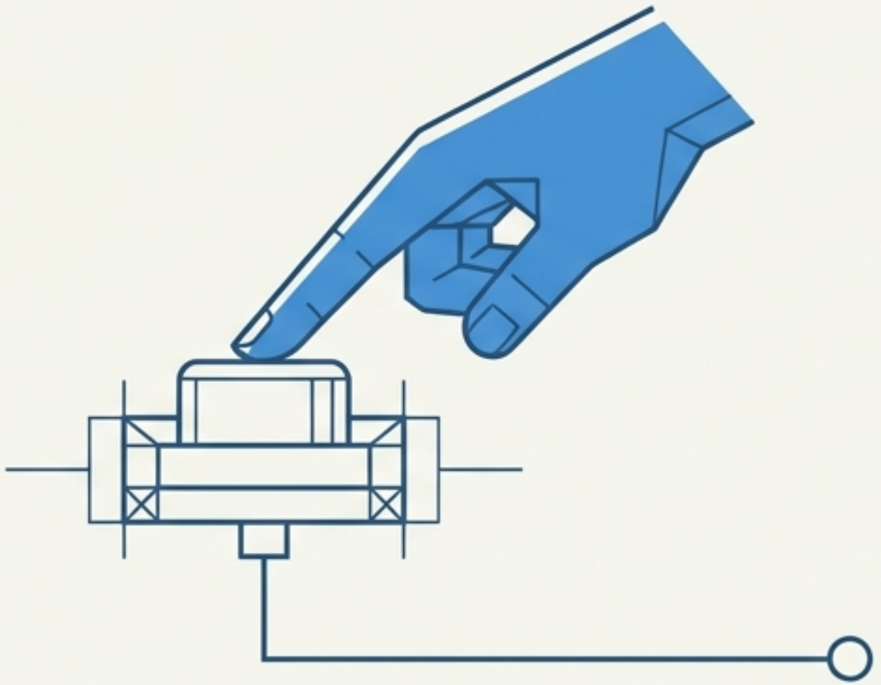
タスク依頼型AIから自律・継続型エージェントへの転換



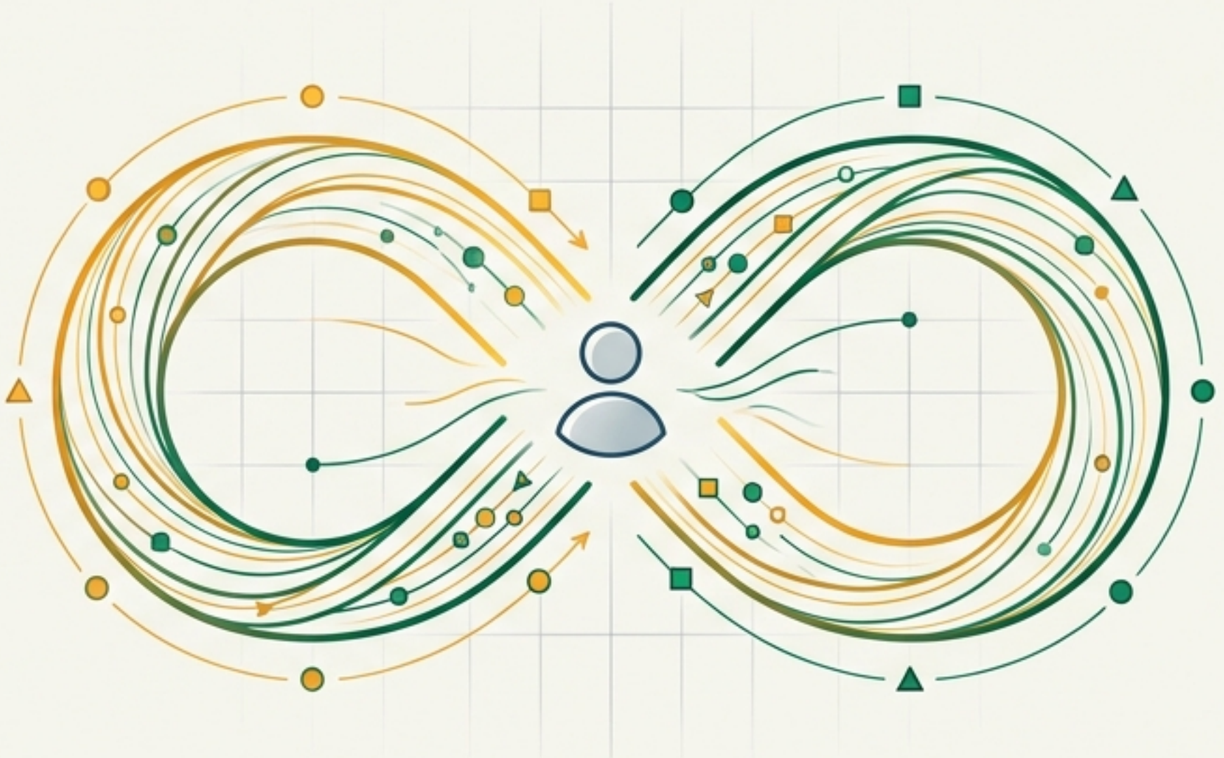
2026年9月30日
調査と考察に基づく戦略的ロードマップ

Gemini Notebook

「AIに個別作業を依頼する」から「継続的な業務を担当させる」へ



従来: 人間が都度トリガーを引く



DevDay 2026: AIが継続的に監視・実行

インフラの進化により、AIは単発のテキスト生成ツールから、特許監視や発明収集を自律的に継続するバックグラウンド・エージェントへと進化しました。

Gemini Notebook

DevDay 2026 発表内容の知財業務マッピング

基盤モデル (Core)

- GPT-6.1 Sol: 公報読解・対比表作成の適用拡大

エージェント・トリガー (Agents & Events)

- dots: 常時稼働の競合監視
- Agents API: 複数システムをまたぐ自動化
- MCP Events: 通知起点での処理開始
- Decisions API: 一次選別・分類

インターフェース (Interfaces)

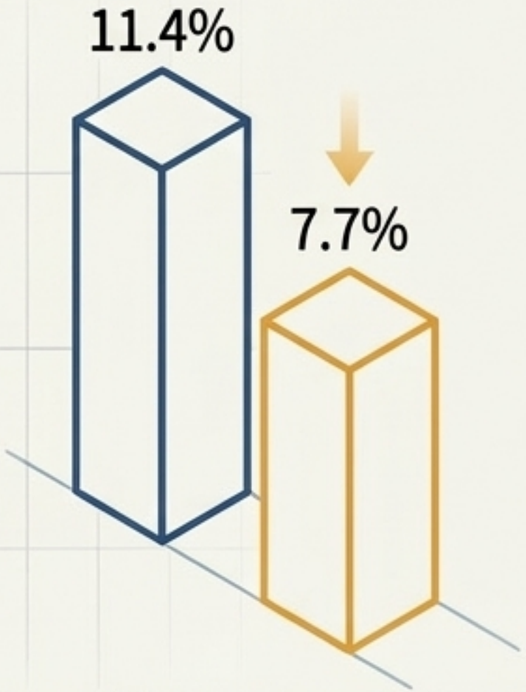
- Plugin extensions: 独自画面での公報・図面確認
- Space & Team Tasks: 判断根拠の蓄積と部門間連携

セキュリティ (Security)

- Private Intelligence: 未公開発明を扱う導入条件の改善

Gemini Notebook

基盤モデルの進化と経済性の変化：GPT-6.1 Sol

コスト (Cost)	コンテキスト (Context)	精度 (Accuracy)
		
Astraの1/5の入出力単価。一部の重要文献だけでなく、より多くの文献への詳細分析適用が可能に。	105万トークンのコンテキストウィンドウ。複雑なPDFや多段階業務に対応。	低い推論設定における事実誤り率が11.4%から7.7%へ低下（※知財特化の数値ではない点に留意）。

Gemini Notebook

dots: 常時稼働する知財エージェントの概念



GPT-6 Astraを基盤とし、独自のクラウドで24時間継続的に作業を実施。競合監視、発明届の整理、調査報告の更新をバックグラウンドで遂行。

注意：「常時稼働＝無条件実行」ではない。外部送信や変や変更操作には厳格なルールと自動レビューが関わり、最終成果物は人間による確認が必須。

Gemini Notebook

イベント駆動型（Event-Driven）の知財アーキテクチャ

ワークフロー例：拒絶理由通知の到着と対応



Gemini Notebook

知財業務領域ごとのトランスフォーメーションと検証点

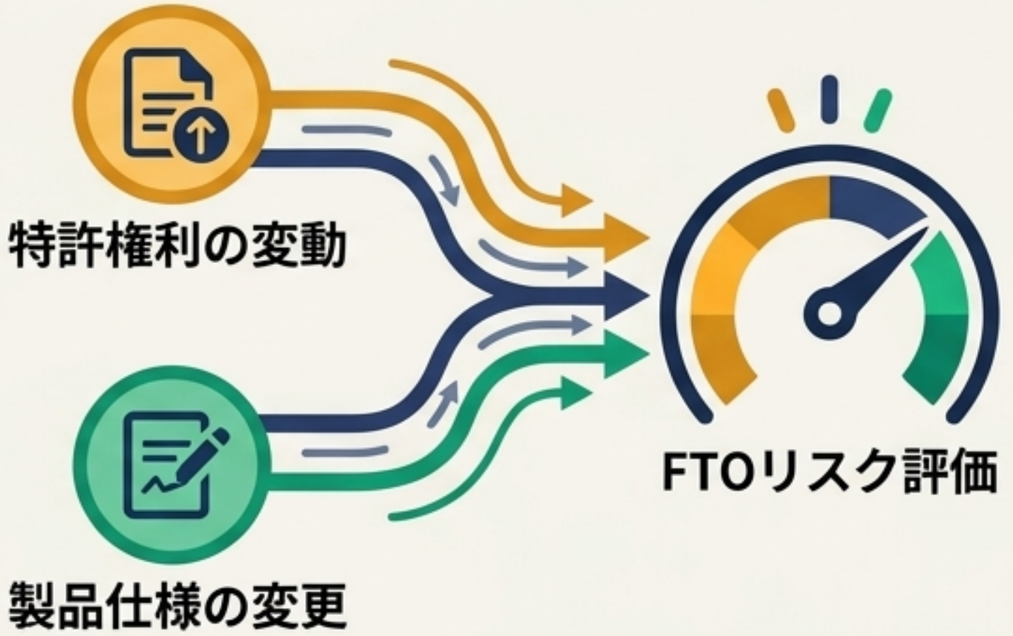
業務 (Task)	期待される変化 (Shift)	必須検証点 (Verification Point)
特許調査/SDI	検索～詳細分析～報告更新を「連続運用」へ	収録範囲、検索漏れ、再現率、除外理由
発明発掘	会議・実験記録からの発明候補「常時収集」	技術的成立性、先行技術との差異、人間の寄与の記録
明細書作成	記載不足や用語不整合の「自動検出・整理」	元資料との一致、未検証の効果・実施例の混入リスク
IPランドスケープ	新情報を取り込んだ仮説と分析の「継続更新」	母集団の妥当性、事実と推測の分離、判断変更の根拠

Gemini Notebook

深掘り：FTO評価の進化（静的調査から動的監視へ）



従来モデル:
一度調査して報告する静的FTO



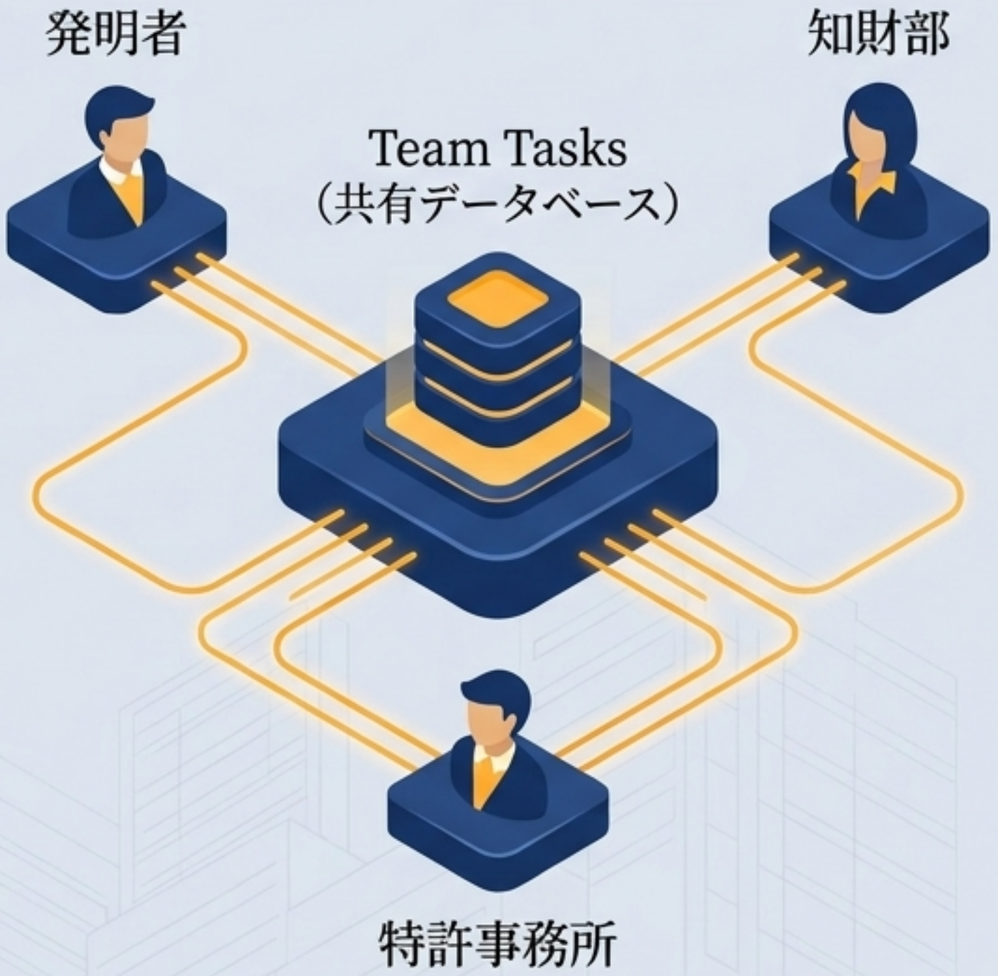
新モデル: 製品仕様と権利変動の双方を追い、**評価を自動更新する動的監視**

課題：これらの機能の特許調査における**再現率**や、**請求項解釈の正確性**に関する公式検証は未だ存在しないため、実務導入には**独自検証が不可欠**。

Gemini Notebook

共同作業の基盤化：SpaceとTeam Tasks

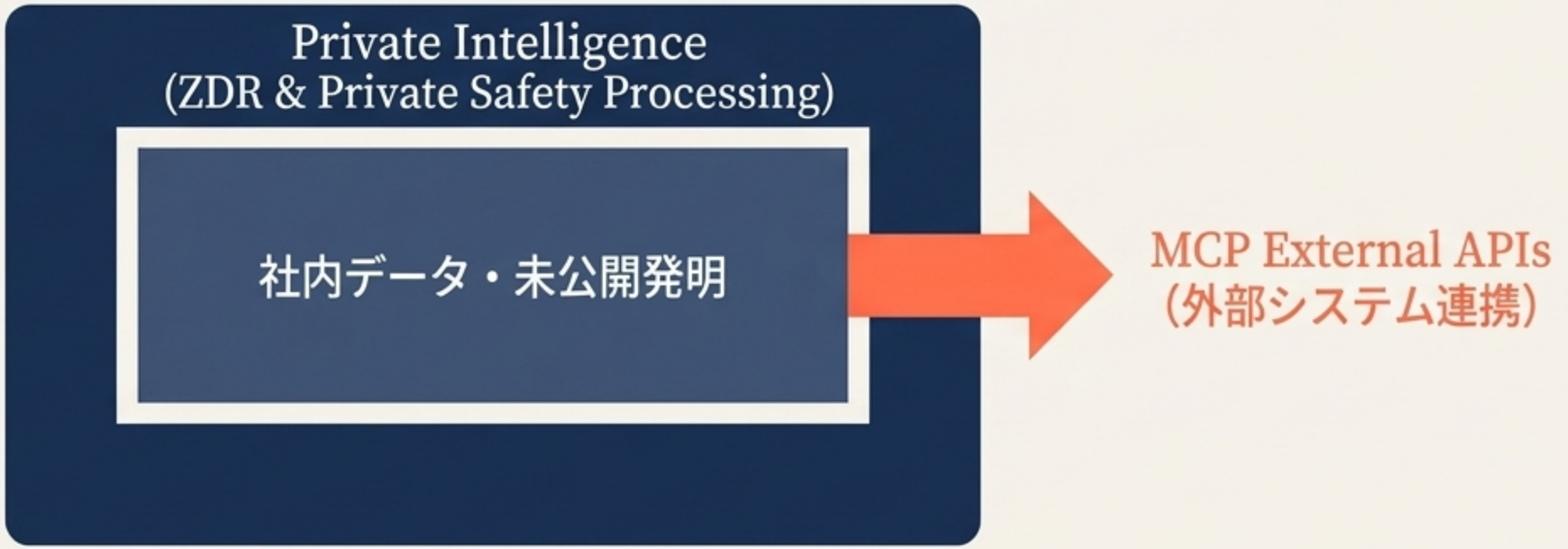
メリット: 個人のチャット履歴に知見が分散する問題を解消。調査根拠と判断の変更履歴をチーム全体で一元共有。



注意点: チーム参加者は過去の実行結果や生成ファイルを全て閲覧可能。現時点では個々のタスクごとに別々のアクセス制限（Granular Access Control）を設定できない点に注意が必要。共同研究や訴訟案件での利用には慎重なチーム設計が求められる。

Gemini Notebook

機密管理の再定義：未公開発明を扱うための条件



保護機能：ZDR（プロンプトや応答を保持しない）とPrivate Safety Processing（自動安全レビュー）の組み合わせによるデータ保護の強化。

盲点：「学習に使われない」という条件だけでは不十分。

必須確認事項：
- ✓ ① 保存期間
- ✓ ② 人によるアクセス権限
- ✓ ③ 共有範囲
- ✓ ④ 外部送信リスク（外部MCPサービスに送信した情報には、その接続先サービスの保持方針が適用される）

Gemini Notebook

エコシステムにおける役割の再定義



企業知財部 (Corporate IP)

文献読解・資料作成から**「AI担当工程の設計・評価」**へシフト。
監視・一次整理を自動化し、事業部との対話や出願・秘匿の高度な経営判断に時間を再配分。



特許事務所 (Patent Firms)

ドラフト作成の速度勝負から**「権利範囲の設計と戦略的助言」**へシフト。
事業との整合性を説明、補正の高度な選択、AI出力の法的な修正・品質保証。

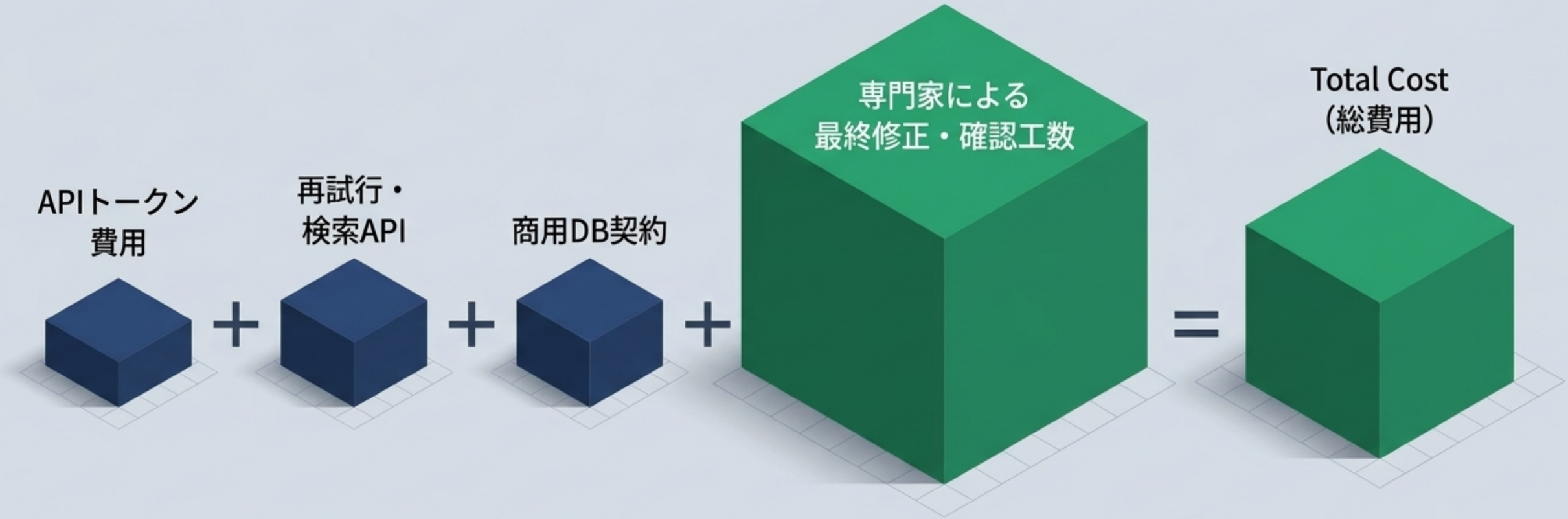


知財サービス企業 (Tech Providers)

汎用モデルの要約提供から**「独自UIとデータ品質」**へシフト。
Plugin extensions等を活用した独自画面の提供、特許データの正確性・法的状態の追跡。

Gemini Notebook

AI活用の真の経済性（Total Cost of Quality）

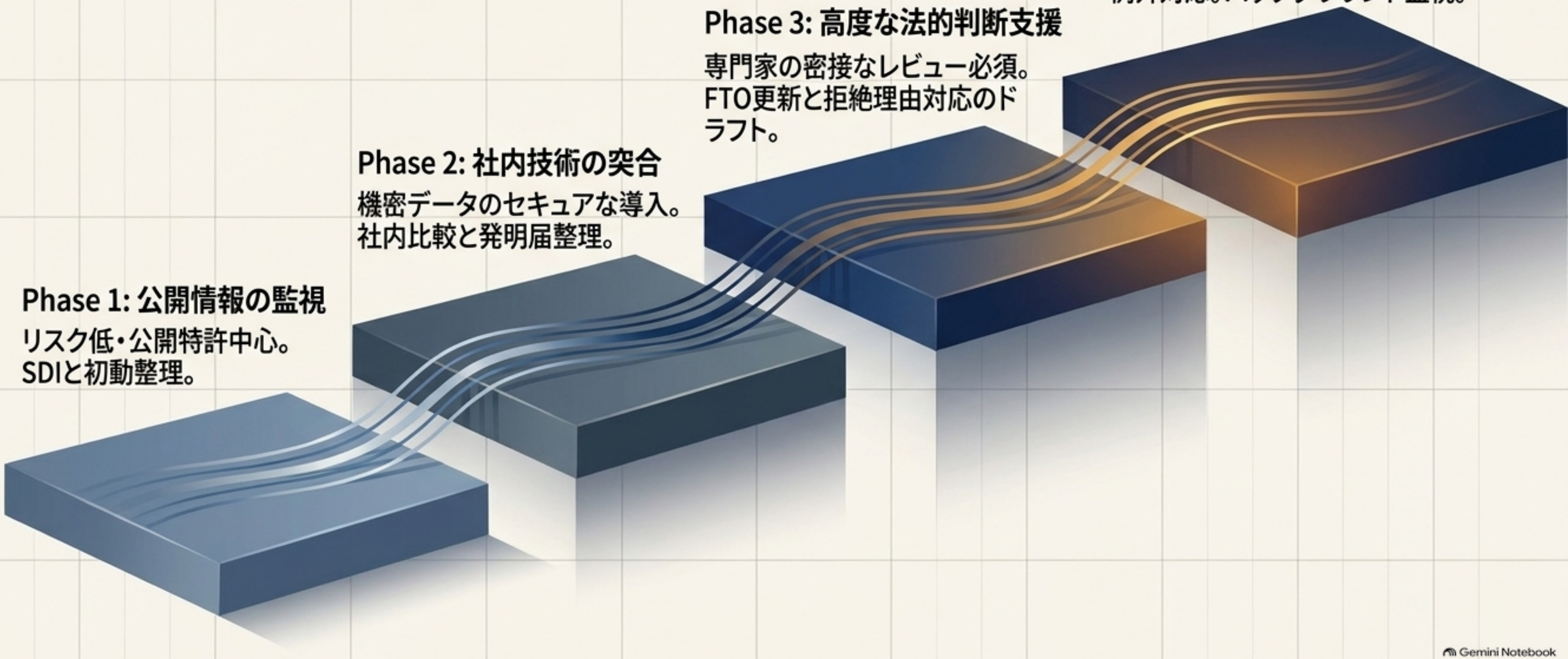


現実：トークン単価の低下（Astraの1/5）が、案件全体の費用を直ちに1/5にするわけではない。

戦略的評価：生成AIのスピードやAPI単価だけで評価せず、「再試行」「高度な検索」「商用DB契約」、
そして何より「専門家による最終的な修正・確認工数」を含めた最終成果物までの総費用でROIを算定すべき。

Gemini Notebook

継続的AI統合のための4段階ロードマップ



Phase 1: 公開情報の監視

リスク低・公開特許中心。
SDIと初動整理。

Phase 2: 社内技術の突合

機密データのセキュアな導入。
社内比較と発明届整理。

Phase 3: 高度な法的判断支援

専門家の密接なレビュー必須。
FTO更新と拒絶理由対応のドラフト。

Phase 4: 自律的・継続的運用

ルールベースの完全な自動化と
例外対応。バックグラウンド監視。

Gemini Notebook

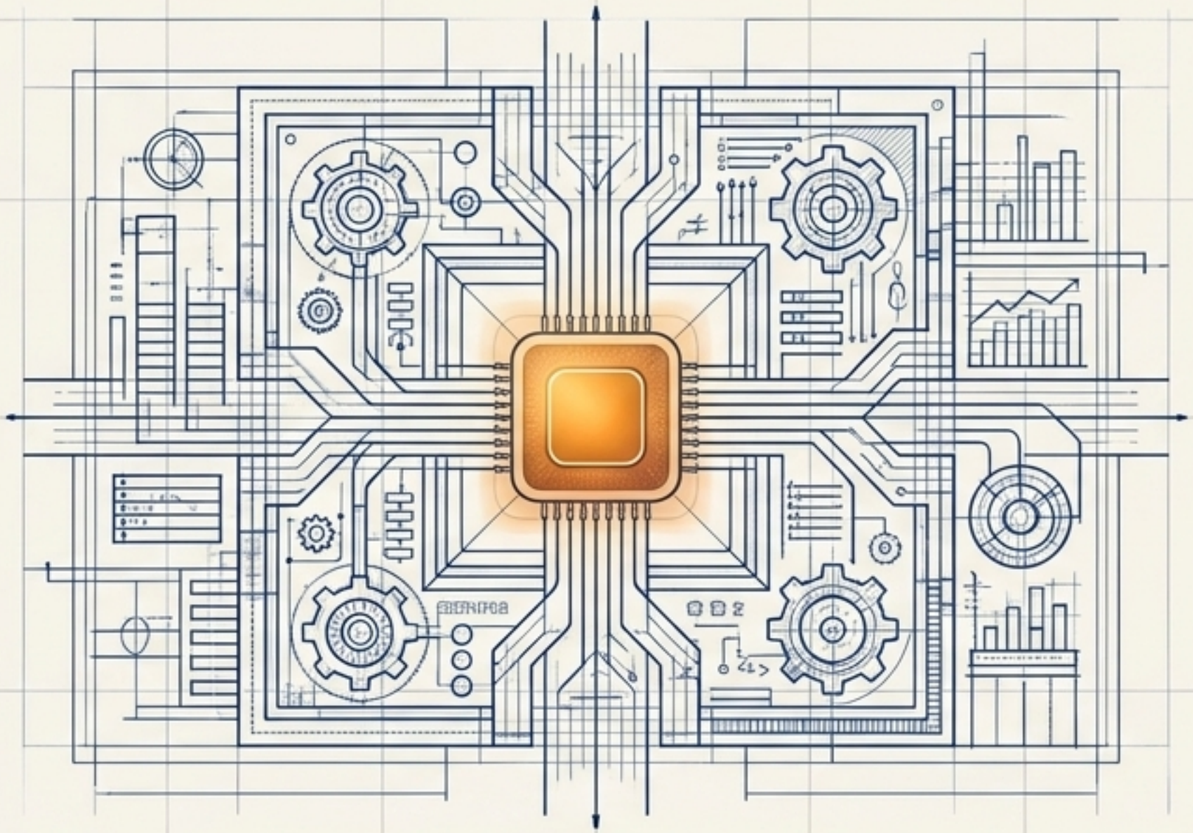
各フェーズにおける導入評価・検証マトリクス

Phase 1	🎯 重要文献の見落とし率、🎯 誤分類の頻度、✅ 出典（グラウンディング）の正確性。
Phase 2	✅ 根拠の一致度、🎯 不足情報の検出力、✅ 機密管理プロセスの堅牢性。
Phase 3	🎯 専門家の修正量（Correction amount）、🎯 重大な法的誤りの有無、✅ 出力の再現性。
Phase 4	🎯 更新の遅延・漏れ、✅ 承認プロセスの確実性、✅ 継続運用における総工数と総費用の削減率。

警告: 平均的な時間短縮だけで採否を決めず、重大なエラー（Fatal Errors）を個別に評価することが不可欠。

Gemini Notebook

結論：継続的インテリジェンスの時代へ



- AIの価値は「都度のテキスト生成」から「継続的な知財情報の収集・整理・更新」へと移行しました。
- その成果を経営や権利化の判断に直結させるためには、AIの単独運用ではなく、「正確なデータ」「追跡可能な根拠」、そして「専門家による判断」を組み込んだ検証可能な業務設計が不可欠です。
- ツールを導入するのではなく、専門家の判断を拡張する新しいワークフローを設計してください。

Gemini Notebook